

桜花会 同窓会誌



2018年3月に屋外危険物貯蔵庫がプレハブ建築となり、旧南1号館東側部分の跡地（H25桜花会誌表紙下の写真と同じ場所です）へと移設されました。写真左手奥の建物は東2号館、右手は理学院東1号館です。



旧屋外危険物倉庫跡地（南8号館西側；写真木々と街灯の間辺り）。4棟あった倉庫はすべて移設され、すっきりとなりました。その奥は住宅街に向けた法面になっています。

2018年10月発行

桜花会 同窓会誌 目次

■ 巻頭言			
	桜花会会長	岩倉 具敦	2
■ 異動教員から			
5年半の助教生活		吉松 公平	4
■ 新任教員挨拶			
		清水 亮太	5
		井口 翔之	6
■ 卒業生から			
あの日あの時大岡山で		浦上 裕次	8
社会人になってもうすぐ四半世紀～自身を振り返って～			
		高谷 佳輝	9
■ 最近の大学から			
平成の時代から新しい時代へ		村橋 哲郎	13
学生への安全教育		岡本 昌樹	14
■ 研究室紹介			
		田中(健) 研究室	17
■ 桜花会賞受賞者の声			18
■ 教育奨励事業報告			
ISPAC2017 参加報告		山下 実都喜	23
ICCC2018 参加報告		鶴田 浩之	24
■ 桜花会企画のご案内			25
■ 会員の声			26
■ あとがき			26

巻頭言

桜花会会長 岩倉 具敦

会員並びに役員の皆様のご協力・ご支援を頂戴し桜花会の活動も着実に充実して参りました。皆様に感謝申し上げます。平成 30 年度の役員が総会で決まりましたので、ご報告申し上げます。



会長には岩倉具敦が引き続き就くこととなりました。副会長は、田村吉隆氏、西本信氏、脇原将孝名誉教授、三上幸一教授、大友明教授、田中健教授の皆様です。会計監事は、中井武名誉教授と堤正也氏です。常任幹事は、一杉太郎教授（庶務担当）、村橋哲郎教授（企画担当）、桑田繁樹准教授（会計担当）の皆様です。

この度高尾俊郎先生が常任幹事を退くことになりました。高尾俊郎先生は 2008 年より本会常任幹事に就かれ、その後断続的に昨年度まで常任幹事をされました。その間主に本会の会計業務を担当され、年度末には会計監事による監査を補佐されてきました。更に庶務、企画担当の常任幹事と連携して、本会の主要行事をスムーズに進めるため尽力され、本会運営に深く貢献されました。長年わたる本会の運営、発展への寄与に関しまして、心より御礼申し上げます。

田中先生は常任幹事を務めて頂いておりましたが、このたび副会長にご就任頂きました。新たに常任幹事（庶務担当）に一杉太郎先生が就任されました。また常任幹事の担当が変わりましたので、桜花会の事務担当が正宗綾子さんから露崎紫乃さんに交代されました。正宗綾子さんには桜花会発展のため多くのご尽力を頂き厚く御礼申し上げます。そして新任の皆様には倍旧のご支援を賜りますようお願い申し上げます。また各種行事遂行をご支援して下さるサポーターの臼井公氏、星野昭成氏、皆川和夫氏の皆様、引き続き宜しく願い申し上げます。

第 7 回目の東京工業大学ホームカミングデイ、2018 年 5 月 26 日(土)と同日に実施されました総会にて上記の役員が承認・決定されたほか、同日の益学長主催の昼食会では、学科別同窓会の代表者、蔵前工業会、副学長・監事・部局長・院長が集まり、学長より大学と同窓会との交流を一層深めたいだけでなく、同窓会が大学に寄与できる重要な存在であってほしいとの挨拶がございました。

また総会後には株式会社三菱ケミカルホールディングス取締役として活躍されている浦田尚男様が「化学産業のイノベーション」と題して講演会が行われました。

講演会には多数の本会会員、卒業生と応化系の学生、院生が出席され、活発な質疑・議論が行われました。

桜花会活動の事業として9年前に設定された「学生と卒業生との交流会」は、今年第10回目を12月8日午後1時からロイヤルブルーホールで開催致します。参加して下さる方は、8月現在確定ではありませんが、コニカミノルタ株式会社、三菱ガス化学株式会社、住友電気株式会社、日本ゼオン株式会社、花王株式会社、旭化成株式会社、住友化学株式会社、日立化成株式会社、キリン株式会社に勤務されている卒業生を予定しております。話題提供各社20分、懇親会1時間を予定しております。11月になりましたら学生さんにご案内する予定です。先生方から学生さんへの参加勧誘を宜しくお願い申し上げます。

来年のことになりますが、第8回目の東京工業大学ホームカミングデイと同日予定の桜花会講演会は、本年同様、企業で活躍されている本学卒業生にお願いしていますので、ご期待ください。

2014年より設定されている、学科別同窓会と蔵前工業会との懇談会が本年も7月3日にRoyal Blue 精養軒で開催されました。副会長の田中健先生が、本年初めて参加されました。本房文雄蔵前工業会理事、鈴木登夫東京支部長、学科別同窓会代表の皆様から活動状況報告他がありました。懇談会を通じてチャンネルを作りながら、蔵前工業会の活性化に繋げて行きたいとの趣旨です。

本年度も桜花会教育奨励事業として、大学院生の国際学会での発表への援助を継続しております。本年度は8月現在1件が採択されております。

桜花会の活動状況に関しましては、桜花会のホームページに掲載しておりますので、ご覧ください。<http://www.apc.titech.ac.jp/~okakai/>

これらの活動を行うための費用は、会費に負うところが多く会員の皆様のご協力に、深く感謝いたします。継続的によろしく願いいたします。

東工大の組織は現在、従来の学部・学科と大学院・専攻を基本とする組織から新しく学院・系を中心とする組織に変更され、すでに3年あまり経過しております。応用化学系（第3類）は、材料系（第2類）と共に物質理工学院に所属します。今後はこの新しい組織で学んだ方々が卒業生に成ってまいります。桜花会は基本的には、従来の応用化学コース・応用化学専攻の同窓会として継続する方針です。しかしながら新組織からの卒業生が増えるとともに応化系卒業生の枠組みが今後不明瞭になって行くものと思われまます。特に本会に近い化工会との関係は考慮が必要でしょう。本年のホームカミングデイ夕刻の総合交流会では桜花会と化工会を隣席卓に

して頂きました。その際、私も化工会会員の皆様のいろいろなご意見を伺いました。本件の具体的な対応については応化会役員、会員の皆様と相談をして運営を考えて行くつもりでおります。

桜花会が有効な会であり続けるよう、皆様のご支援・ご協力を頂戴して進めて参ります。今後とも宜しくお願い申し上げます。

異動教員から

■ ■ 5年半の助教生活

吉松 公平（東北大学多元物質科学研究所 講師）

この度 2018 年 10 月 1 日付で東北大学の多元物質科学研究所に講師として異動しました。…と言ってもこの原稿を書いている今は残暑厳しき 8 月の末、異動先では云々という報告をすることもできません。異動先も勝手知ったる所で、目新しさは仙台という地理くらいなものです。ですので、私が旧応用化学専攻でお世話になった 5 年半をざっくばらんに語りたいと思います。

はじめに、高エネ研での放射光実験と不安定なポスドク生活に疲れていた私を助教として採用していただいた大友先生には非常に感謝しています。元素戦略プロジェクトの研究資金や研究室学生の増員時期と重なり、比較的自由的なテーマで研究をすることができました。私にとって新たな知識と技術を習得する有意義な助教時代であったと思っています。

初めて大学教員となった私にとって、研究室の助教が具体的にどのような仕事をしているかは全くの未知でした。しかし私が着任した当時、すでに研究室には大島先生（現佐賀大学准教授）が助教としておられました。大島先生からは研究室の助教がすべき雑用とは何であるかを教えていただきました。研究所生活に慣れた私にとってまずは第二助教としてスタートできたことは非常にありがたいことでした。研究スタンスや学生への指導など反面教師としたことも含めて糧となりました。

第二助教という立場を私も専攻もうまく利用してきた 5 年半だったと感じています。応用化学専攻消滅のどさくさに紛れて着任時の曖昧な立場を踏み倒し、5 年半も在籍させて下さった大学改革にはある意味感謝しております。また米谷先生（現東京大学准教授）が異動する際に、担当していた学生実験をお手すきの私が引き継ぎ、門外漢の固定床流通系触媒反応をさも専門分野のように指導する機会にも恵ま

れました。ガスクロを打ったことのない私に偉そうに指導された当時の学生には申し訳なかったですが、付け焼き刃の知識でもなんとか学生実験を担当できるという良い経験になりました。恐ろしいことに異動初日の10月1日から東北大での学生実験を担当することが決まり、再び薄っぺらの知識で学生を指導することになりそうです。

学部4年生の頃から地方の国研で研究をしていた私にとって、東工大は初めての大学研究室生活でした。授業に気持ちを、夏休みにやる気を、実家からの通学に時間を奪われ、しかし教授からは研究が進んでいないと怒られる、そんな大岡山の学生は大変だなあとしみじみ思いました。こんなことを書くと教授・准教授の先生方から叱られそうですが、自分で研究する方が座学よりも遥かに多くの知識と技術が身につくはずです。すなわち、修士・博士の5年間でもっと研究をしましょう（特にうちの学生は！）。

最後になりますが、私からの絶え間ない伝票を粛々と処理してくださった大友研究室歴代秘書の窪瀬さん、竹村さん、井原さん、そして旧応用化学専攻の教授、准教授、助教の皆様へ感謝の意を述べまして私からの挨拶とさせていただきます。ありがとうございます。

新任教員挨拶

■ 清水 亮太 助教（2018年4月着任）

平成30年4月1日より一杉研究室の助教として着任しました清水亮太と申します。18歳まで福岡県で育った後、東京大学で博士号（理学・化学専攻）を取得後、東北大、東京工業大学、科学技術振興機構さきがけ専任研究員を経て着任いたしました。どうぞよろしくお願いいたします。

これまでの研究テーマは多岐にわたり、主なキーワードだけでも「酸化物」、「水素化物」、「薄膜合成」、「原子・分子観察」、「高分解能測定」、「Li電池」など一見すると脈絡がつかみづらいかと思われます。しかしながら、大きな方向性としては、『原子・分子の単位に立脚したものづくりによる新物性・機能開拓』にあり、その対象として酸化物やLi電池材料、最近では水素化物薄膜へと展開し、プロトン(H⁺)ではなく水素化物イオン(H⁻)に着目して新たな機能の探索を目指しています。水素は有機化学においても酸化・還元反応スキームで重要な役割を果たしますが、特にこの水素を手なずけるのは容易ではなく、これまでの「測定技術・知見」と「原

子レベルの合成観」を活かした独自の研究を目指しています。

また、現在取り組んでいる研究課題の1つとして、薄膜合成に「機械学習」を導入し、圧倒的なスピード感で新物性・機能を創出することを目指しています。薄膜合成では、「温度」、「圧力」、「ガス組成」、「原料組成」、「原料供給速度」、「基板」など無数の実験パラメータをいち早く最適化する必要があります。ここでは、機械学習の1つである「ベイズ最適化」を駆使した成膜システムの構築を行っています。この課題は研究の枠を超え、学生に対する教育効果も大きいと確信しています。人工知能（AI）やロボットが席卷し、単純労働が排除される時代が迫っており、このような時勢において、「人間にこそ必要とされる技術・思考能力」を鍛錬する絶好の学習機会になると考えています。

着任後の新たな悩みが4Qから開始される学生実験の担当です。自分が学生時代には何気なく（時にはいい加減に）作業していましたが、企画された実験の学術的背景の奥深さや、学生の見えないところで安全面や教育面で様々な配慮がなされていることに驚かされています。研究のウェイトが大きかった場では味わえなかった新たな一面を楽しみつつ、研究・教育に励む所存です。諸先生方、OBの皆様のご指導・ご鞭撻を賜りますようお願い申し上げます。

■ ■ 井口 翔之 助教（2018年4月着任）

2018年4月1日付けで、山中研究室の助教として着任しました、井口 翔之（いぐち しょうじ）と申します。どうぞよろしくお願い申し上げます。

私は、2011年に東京学芸大学教育学部を卒業した後、京都大学大学院へ進学し、修士課程・博士後期課程の5年間にわたって工学研究科分子工学専攻の田中庸裕教授のご指導を賜りました。その後、産業技術総合研究所太陽光発電研究センターに2年間在籍し（ポスドクとして1年、常勤職員として1年）、本年度より、物質理工学院応用化学系 山中一郎教授が主宰される研究室に採用して頂きました。歴史ある東京工業大学桜花会の同窓会誌にて、着任のご挨拶を執筆する機会を頂戴できたことを、大変嬉しく存じます。

高等学校で化学を教えることを夢見て東京学芸大学へ入学したのが2007年ですので、11年前のことになります。卒業研究のために配属された研究室で「触媒」の世界に出会ったことが、研究者の道を歩むことになったきっかけです。当時は、エタノールをプロピレンへ転換する触媒の開発に取り組んでおり、初めての世界を目の当たりにする日々を過ごしているうちに、いつの間にか研究にのめり込んでいったことを、非常に鮮明に覚えております。京大に進学してからは光触媒を主な研究

テーマとし、人工光合成を達成するための水中での CO₂ 還元に関する研究に取り組みました。周囲の方々からの御助言や幸運が重なり、5年間でCO（CO₂の還元生成物）の生成速度が1000倍に向上しましたが、活性を確認したときの感動は（ガスクロのチャートを見たときの心臓の高鳴りは）、今でも忘れることができません。その後、産総研での2年間では、光電気化学反応による物質変換をテーマとして研究に取り組みましたので、京大5年+産総研2年の計7年間は光触媒を主に扱っていたこととなります。

さて、そんな私ですが、「役に立つ触媒を創り出したい」という希望を胸に、東工大へ着任致しました。当然ですが、私一人の頭が考えつくことや、私一人の手がやれることには限りがあります。東工大の優秀な学生さんと一緒に研究を進めることができれば、学生さんの柔軟な発想や的確な実験結果が相まって、考えていたことが十にも百にも広がっていくのではないかと想像しております。また、大学入学時に思い描いていたものとは舞台が変わりますが、東工大で教育に携われることは、私にとっての大きな喜びです。将来を担う優秀な技術者や研究者を一人でも多く輩出できるよう、「触媒」と「エネルギー変換」を題材にして積極的に教育に取り組んでいく所存です。そのためには、私自身が魅力的な研究を展開しているべきであり、その点を自身へのプレッシャーとして感じながら日々を過ごしたいと思っております。

現在、山中研究室では、電気をエネルギー源とする触媒反応（H₂O₂合成、CO₂還元、炭化水素の部分酸化、トルエンの水素化）と、熱をエネルギー源とする触媒反応（メタンの酸化カップリング）に取り組んでいます。着任して5ヶ月が経ちましたが、山中先生と学生さんがこれまで作り上げてきた触媒系の特徴や性質を理解し、課題や問題点を提案できるように勉強を重ねているところです。私がこれまでに取り組んできた光触媒とは全く異なるように思われるかもしれませんが、固体触媒材料の評価や固体表面上での基質分子の活性化がキーポイントである点は同じであり、各種分光法をはじめとするキャラクタリゼーションの経験を生かせる場であると考えております。現在の触媒研究では、「活性の向上」と「触媒材料の正確なキャラクタリゼーション」は切っても切り離せない関係にあります。ただし、活性が低いものや、他人が開発した触媒材料を対象にしたキャラクタリゼーションではあまり面白くありません。我々の研究室オリジナルで活性が高い触媒材料を正確に分析し、さらなる活性向上を可能とする設計指針を得るような研究を展開していきたいと考えています。

まだ右も左も分からぬ若輩者で、ご面倒をおかけしてしまう場面があるかと存じますが、ご指導ご鞭撻を賜りますよう宜しくお願い申し上げます。

卒業生から

■ ■ あの日あの時大岡山で

浦上 裕次（「アイスノン」でお馴染みの白元アース株式会社）

平成 5 年博士（大塚研究室）

10 年ぶりの桜花会誌への寄稿機会を頂き誠にありがとうございます。この間、所属会社の民事再生とそれに伴う新会社への転籍など、会社員としての悲哀もありましたが、誰もが経験できることではないので、悪いことばかりではなかったと振り返っています。

さて、大岡山には丸 10 年通い、卒業してからでも四半世紀になります。その間、おかげさまでいろいろな機会（リクルート、セミナー、OB 会…）をいただき、何度も足を運ばせてもらっています。用事を済ますだけでは勿体ないので、学内や駅の周辺をフラフラするのですが、すっかり変わってしまった風景やお店もある一方で、私が通っていた昭和と平成の境目をそのまま残している処もあります。あの日あの時の大岡山での出来事（記憶）と今（現実）を結び付けてみました。

「大岡山で」と、言っておきながら、いきなり「第五回共通一次」を受けた**田町の付属高校**。ここが私と大岡山との関わりの原点かと思います。ちなみに当時は 5 教科 7 科目の 1000 点満点でした。この付属高校（現在は付属科学技術高等学校）が今につながっているか？いきなりの難問です。ありました！ 私の前に座っている女性社員がなんと付属高校出身でした。縁がつながりました、まずクリア。

そして、入学が決まると、**第一勧業銀行大岡山支店**。東工大生のみんなが持っていた白に金帯のキャッシュカード。店番 145 はある意味ステータス。当然今でもみずほ銀行大岡山支店の口座使っています、お給料の振込もこちらです。

入学してクラブ活動、思い出の場所はなんと**本館入口**。オリエンテーリング部の新歓行事にて、本館入口にチェックポイント（CP）の印。どうみても CP なし…、よく下を見ろと言われて、下を見ると採光の透明部分。採光窓下には**通路**があり、そこに CP がありました。玄関右手の坂の途中から当時は薄暗い通路に入れたのですが、今はどうでしょうか。この場所、出来事は、私の仕事観に強く影響しています。怪しい時は他の解釈や考え方がないか、横からの抜け道がないか、そして、人を信じなくなりました（笑）。

学外に目を移せば、**駅周辺の食べ物屋群**。とんかつの**あたりやさん**、そばの**やぶ**

さん、そして**信華園**さん。卒業後 20 年以上経ってから、某先生（先輩）の内輪の昇任祝いを信華園さんで開催。参加者のみならず、お店の方も交えての仮面ノリダー（とんねるず&伊藤淳史）話で盛り上がり、まるで 20 年前に戻ったようでした。

同じく学外の**大岡山駅**。当時は改札口が地下にありました。改札口前の売店は週末の新聞購入場所。そしてちょうどすずかけ台キャンパスに生物系の専攻ができ、そちらへ移る友人と洗濯機を電車で運んだ思い出。洗濯機の友人は私の人生でとても重要な人ですが、これは後述。

そして一番大事なのは当然、**北棟（南一号館）**。野球選手の血と汗と涙がグラウンドに！と同じですね。技術者としての青春はここにあったのだと、思います。壁から岩清水という名の雨漏りがあったり、屋上（ドラフト出口）にはカラスも止まらないとの伝説があったり、ガスクロのカラムで感電したり、800℃の電気炉を背中にエアコンすら効かない部屋で熱心に研究したり、研究の振りして同人誌の原稿書きしていたり…。そしてこれらのネタを共有し、いまだに会う度に同じ話で何回も笑える仲間たち。その仲間とはいまだに同じ趣味で毎月会って、年 1 の泊りがけ合宿に行ったりしています。そして、仲間の一人で同じ趣味を持ち、洗濯機を運んだ友人。その後彼がいた会社に転職し、この転職先で知り合った女性と結婚して今の家族があります。まさに、今の人生は「**あの日あの時の北棟がすべて**」と、改めて実感させられました。

さて、趣味ですが、この原稿は年 1 回の泊りがけ合宿前後に頑張っ書いている。今年の合宿先は緑豊かな札幌。毎月のミーティングは府中と中山で 30 年以上続けています。10 年後の 3 回目の寄稿はこちらの内容で書かせていただく予定です。

全部今に繋がって良かった。

■ ■ 社会人になってもうすぐ四半世紀～自身を振り返って～

高谷 佳輝（丸善石油化学株式会社）

平成 6 年修士（鈴木寛治研究室）

はじめに、桜花会誌への寄稿の機会をいただきました、鈴木研の先輩でもある高尾先生に感謝します。日頃、なかなか研究室に顔を出すこともできず、ご無沙汰ばかりで恐縮していたのですが、このような形で少しでもご協力させていただけることを有難く思います。

私は平成 4 年に当時の化学工学科応用化学コースを卒業し、平成 6 年に修士課程

を修了して現在の会社に入社しました。学部の4年生になる時から研究室に所属して研究活動をスタートさせたわけですが、恩師の鈴木寛治先生が長津田から大岡山へ教授として赴任された1年目ということもあり、当時は研究室の整備から開始し、先輩の高尾さん、福島さん、そして同級生の多田くん、平川くんと一緒にドラフトのペンキ塗りや実験台のアングル組み等をしている傍ら、鈴木先生がガラス細工で真空ライン装置をくみ上げていく、そんな状況をよく覚えています。子供のころから触媒に興味があったこともあり、均一系反応による高効率触媒へのアプローチの一環として、有機金属化学の研究をしたい、ということから鈴木研を選んだわけですが、後々、この選択が自分の将来に大きな影響を与えてくるとは、その時は知る由もありませんでした。

鈴木研では、配位不飽和な三核ルテニウム錯体ペンタヒドリド錯体の合成および環状ジエン・アセチレン類との反応、というテーマで研究をさせていただきました。当時、三核ルテニウムペンタヒドリド錯体（当時はトリヒドリド錯体と考えていましたが・・・）は先輩方が合成したことがあった、という錯体で、その後の再現実験でも錯体の生成が確認されないことから、まずはこの錯体の合成法の確立から研究を開始しました。有機化合物との興味深い反応が種々確認できましたが、特に印象深かったのはシクロペンタジエン類との反応では室温で容易に炭素-炭素結合が切断され、メタラサイクル化合物がほぼ定量的に生成されたことでした。当初は炭素-炭素結合が室温で切断されるとは思わず、NMRチャートを見ながら頭を抱えていたことを思い出します。X線結晶構造解析により構造が明らかになった時には改めて有機金属の特異的な反応性発現の可能性を実感したものです。

鈴木研時代、私は真面目な学生ではなかったと思いますが、それでも辛抱強くご指導していただいた鈴木先生には本当に感謝しています。この環境で有機金属錯体化学の基礎を勉強できたことが今後の自分にとっては研究職で進む際の礎になりましたし、自身の化学的思考の根っこになっていると今でも思っています。そういう出会いに恵まれたことに改めて感謝しかありません。

修士課程を修了し、平成6年に今の会社に入社しました。最初の3ヶ月間は石油化学プラントでの実習を経験しました。丁度、大規模定期整備の年でもあり、普段はなかなか見られないタンク等の開放点検を見せてもらったり、高さ40m程度のナフサ分解炉の上に登って配管の確認をしたり、大学の研究室では絶対に経験できないことを体験できました。実習を終えると研究所へ配属され、ポリオレフィン製造用触媒の開発とプロセス検討に従事することになりました。作業仮説を立てて検証、考察して再度検証へ、という研究の基本はそのままですが、やはり開発の時間軸と要求される性能に改めて企業研究の存在意義について意識が高まったことを記憶し

ています。

平成9年からは会社の国内留学制度を利用して、京都大学で林民生教授のご指導の下、ロジウム錯体触媒による有機ボロン酸誘導体の α, β -不飽和カルボニル化合物への不斉1,4-付加反応、というテーマで研究をさせていただきました。東工大で有機金属化学の基礎を学び、会社では樹脂製造のツールとしての錯体触媒開発を行ったことで、次は精密合成の研究をしてみたい、と思ったことが京都大学への編入学を希望した動機でした。国内留学先として林先生を紹介してくださったのも鈴木先生でした。“どうせ行くなら厳しいところがええやろ”という一言は今でも覚えていますし、京都へ行く直前に挙げた結婚式でも鈴木先生から“3年間で学位を取るのは非常に大変だが・・・”と温かくプレッシャーをかけていただいたことは、私の親戚も含めて今でも話題になるくらい、インパクトがありました（そして実際、3年間で学位を取ることの大変さを痛感する3年間を送ることになりました）。

京都大学では毎日、その日の研究成果を林先生とディスカッションする機会があり、大変ではありましたが非常に勉強になりました。反応がいかない、想定と異なる実験結果が出た、こういう時こそ色々と考え、改善するためのヒントを拾い出すためにも反応機構を類推しながら常に作業仮説を立て、実験して、考察して、を繰り返しながら検討することを徹底してきた記憶があります。有機合成は知識としては知っていたつもりでしたが、実際に研究に携わることで色々と深く考えられるようになったのかな、と少しは思っています。

鈴木研、林研、いずれも私が携わったテーマが継続され、その後、博士号を取得する学生さんが何人か出ていることは、そのテーマで研究してきた者として嬉しくもあり、“自分の研究成果も役に立ったのかな”って、ちょっと誇らしくもあります（もちろん、指導教官が大変すごい方々ですし、学生さんが優秀なのも間違いないです）。厳しくも楽しく、充実した研究室生活を送ることができたことに改めて感謝しています。

修士を修了し、社会に出てから25年目、四半世紀が過ぎようとしています。そして研究職を離れて8年が過ぎました。平成22年に研究から経営企画部へ、平成24年に営業本部機能化学品部へと異動して今に至っています。経営企画部では2年間、大黒柱の石化事業とは別の柱として機能化学品事業をどう拡充していくかについて考え、事業部と連携しながら対応してきました。部署では石油化学コンビナートにおける弊社の位置付け、存在価値について考えることができたと共に、中国での石化プラント増強、シェールガスの本格稼働への対策として今、何をすべきか、今後の事業維持、成長のためにはどうすべきか、ということ、研究の視点だけではなく、経営サイド、顧客サイド、と多方面から考えることができたのは良い経験でし

た。東日本大震災もあり、弊社 MEK プラントも被災したために 1 年間稼働させることができず、どうこの 1 年を乗り切るか、復旧後のストーリーをどう描くか、そういう体験もありました。その後、現在の部署である機能化学品部へ異動し、電材関係（特に半導体材料関連）の営業を 2 年やったのち、サプライチェーンマネジメントの充実を図るべく、購買先管理、生産管理、原価管理、法対応、事業企画と、一手に“万屋”として日々悪戦苦闘している状況です。事業として今後どうしていくのか、目標を掲げながら現実とのギャップを埋めるべく改善を図る、日々その繰り返しですが、過去にはできていなかったレベルに事業として今は手が届こうとしている、そんな成長に気付いた時は非常に嬉しいものです。今後もますます半導体分野における品質要求は厳しくなっていますが、対応できなければ事業としての将来性もない、ということになってしまいますので、計画的に改善を図りながら、生き残っていききたいと思っています。もちろん顧客の言いなり、単なる御用聞きだけでは意味がありませんので、事業として今後弊社がどう対応していくのか、顧客に対して提供できるメリットは何か、ということを中心にきちんと提案しながら進んでいければ、と考えています。

研究室に配属されてから現在まで、自身の過去を振り返ってみると、色々な出会いがあり、いい影響を与えてくれたなあ、と率直に思います。特に修士、博士、それぞれで異なる指導教官の下で研究を行ったことで、問題を解決するための考え方、アプローチの仕方、幅広く体験することができたことは自分に大きな影響を与えてくれましたし、その結果、自分の中に思考、考察のための“引き出し”が増えたことに繋がったと感じています。また、鈴木研、林研と異なる研究室で研究生活を過ごしたことにより人脈がより一層ひろがったこと、これも得難い成果であったと思います。また会社でも研究以外の部署を経験することにより、仕事の見方、視野が広がったような気がします。

違う研究室、違う部署、スタート時点は不安も多いですが、いざ動き始めると色々勉強になり、良い経験ができることの方が多くなるような気がしていますので、これからも積極的にチャレンジすることを忘れず、自ら異環境へ飛び込むことも含め、自身の視野を広げて物事を進めていけるよう尽力していきたいと思っています。どんな機会も自分を成長させることができる糧になり得るものであり、それを糧とするかどうかは自分の考え方しだい、どうせなら貪欲に前向きにとらえていこう、と思っています。

これからも若い研究者の皆さんはより一層、世界に向けて羽ばたいていくことと思います。機会を逃さず、異環境に飛び込む勇気をもって、一歩前へ踏み出していけることを切に願っていますし、期待しています。技術立国日本、大上段に構え

て言ってみますが、東工大の卒業生はまさにその最前線で頑張っている方々も多いでしょうし、これからもそういう後輩達が社会に出ていくことでしょう。さて、自分自身も、この寄稿を機に改めて自己を顧み、更なるレベルアップを目指してみようと思います。少しでも皆さんに負けないように…

追伸：今年の2月、4月と東工大の仲間と十数年ぶりに飲む機会がありました。皆、同じように年は重ねてきていましたが、いざ会ってみるとあっという間に学生時代の感覚が呼び起され、これもまた同じ時期を一緒に過ごしてきた同級生ならではの良さなのだろうと実感しています。皆それぞれの組織で best を尽くして頑張っている、そんな仲間の姿も励みになり、自分も更に頑張らなければ、と気持ちを奮い立たせてくれました。在学中の皆さんにはぜひ、仲間を大切に、将来的に深く付き合いが続けられるような仲間を作ってください。きっと人生がより楽しくなると思います。

最近の大学から

■ ■ 平成の時代から新しい時代へ

応用化学フォーカス主任・コース長 村橋 哲郎

初秋の候、桜花会の皆様におかれましては、益々ご健勝のこととお慶び申し上げます。

東京工業大学は、本年3月に指定国立大学法人の指定を受けました。本学は、今後も国立大学の推進役としての役割を果たしていくことが期待されています。さらに、本年度には卓越大学院プログラムへの申請もおこなわれています。学内では、学部と大学院を統一して「学院」を創設する教育改革の3年目に入り、学院に所属する学年と専攻・コースに所属する学年が混在する移行期にあります。現4年次学生は化学工学科応用化学コースの最後の学年であり、本年度をもって応用化学専攻および化学工学科応用化学コースは実質的な役割を終えることとなります。一方、本年3月には、物質理工学院応用化学系所属の大学院生が初めて修士課程を修了しました。物質理工学院は大岡山キャンパスとすずかけ台キャンパスにまたがっているため、修士論文発表会は2つのキャンパスの大学院生による合同で行われました。今後、学院を通して、教員や学生の人材交流や研究交流が以前に増して活発になっていくと期待されます。

大学の運営においては、和田雄二教授が引き続き本年度も物質理工学院の初代学院長として学院運営の先頭に立っておられます。また、山中一郎教授が本年度より物質理工学院副学院長を務められています。

この1年間の応用化学コース教員の人事異動をご紹介します。若手教員として、清水亮太助教（一杉研）と井口翔之助教（山中研）が本年4月に着任されました。応用化学系を担う若い力としてご活躍いただけることと思います。また、吉松公平助教（大友研）が本年10月より東北大学多元物質科学研究所講師に異動されま

す。長きにわたる多大なご貢献に感謝し、新天地でのご活躍を祈念しております。

平成の世も残すところ1年を切りました。様々な出来事があった平成ですが、その中でも、平成7年頃から実質的に始まったインターネットによる情報技術革命は、世の中を大きく変えてきました。情報技術革命の短期的な影響が顕在化しているのが開始20年を過ぎた現在であるとするならば、平成の次の新しい時代では、さらに中長期的な影響が現われることになるで

ありましょう。いずれにしても、各々が実質的な力を身につけ、本質的な課題に果敢に向き合うことが鍵になることに変わりはないと思われ

■ ■ 学生への安全教育

岡本 昌樹（物質理工学院 准教授）

昨年度、大学構内に何度も消防車が入りました。幸いいずれも初期消火で鎮火した小火でしたが、消防署から厳しく指導され、教職員を対象とした消防署による講習も行われました。一方、学生を対象とした安全教育は、15年前から大学院講義の一つとして開講されています。この講義について簡単に紹介させていただきます。

文科省の21世紀COEプログラムの講義として、友岡先生が中心となって実習を伴う大学院講義「環境安全教育」を立ち上げました。「安全と環境保全に関する概説」、「環境保全」、「救急救命」（AED実習）、「消火・火災」（消火器を用いた消火訓練）、「薬品・ガス」（高圧ガスや寒剤の取扱実習）の5回の講義から構成されていました。対象学生は、化学、応用化学、物質科学、化学工学、物質電子化学、化学環境学専

攻の修士1年生及び博士から入学した博士1年生です。発足当初の講義の様子については友岡先生が書かれた桜花会誌の記事（平成18年8月発行の桜花会誌12～13ページ）をご覧ください。

COE終了後も継続開講されており、現在では前述の五つの講義に、事故を未然に防ぐための「危機管理」の講義を加えた六つの講義から構成されています。3年前の教育改革において学院がつけられたことをきっかけに、当初から参加している理学院化学系（1類）、物質理工学院応用化学系（3類）に加えて、物質理工学院材料系（2類、金属分野を除く）も参加し、化学関連の研究を行っている学生のほぼ全員が受講するようになりました。総勢350人程度の講義です。受講者数が多いため、大岡山で2回、すずかけ台で1回、計3回開講しています。15人の教員が担当しており、旧応化専攻からは、田中浩士先生、桑田先生と岡本が担当しています。

安全教育は学生にとって当然と思える内容も多く、しばしば興味を失いがちな講義であるため、受講意欲を高める必要があります。例えば、「救急救命」におけるAED実習では、9年前から消防署が認定する普通救命講習にし、消防署から救命技能認定書がもらえるようにしました。また、「消火・火災」では、東京消防庁消防技術安全所の方に、危険物の1類から6類までの全ての燃焼実験を、学生の目の前で実演してもらっています。このデモ実験は学生に好評で、ビデオの視聴では体験できない音、におい、光などを体験することができます。マグネシウム火災に水を加えるとどうなるかも、実演していただいています（写真1）。

写真1



さらに本年度の一部の学生には、VR（バーチャルリアリティ）防災体験をしてもらいました。通常の「消火・火災」の講義では、①水消火器による消火実習（全員体験）、②粉末、二酸化炭素、金属火災用消火器による消火実習（一部の学生）、③危険物の燃焼実験の見学を、三つのグループに分けて順番に行います。これらに

加えて、田園調布消防署のご尽力により、日本に1台しかないVR体験防災車を使った防災体験を行うことができました（写真2）。火災のVR体験では、3D動画に連動して椅子も動き、熱風や水しぶきも出るため、学生たちに大好評でした。火災以外に地震、水害のプログラムがあり、全てのプログラムを体験した方の話ですと、一番迫力のあるのは地震だそうです。もしVR体験防災車に乗る機会がありましたら、是非、地震を選択してください。

2007年から2015年までの8年間、大岡山キャンパスの化学系および応化系の研究室では消防車を呼ぶような火災はありませんでした。しかし2016年以降、毎年1回以上、消防車が入構しています。ただ、火災が発生した時には適切な消火活動がされており、安全教育の効果が出ているのではないかと思います。まだ不十分な部分もあると思いますが、研究室における安全の一助になることを願って、毎年、安全教育を行っております。

写真2



研究室紹介（田中(健)研究室）

田中健研究室は2015年2月に東京農工大学から移転し、東京工業大学 物質理工学院 応用化学系（旧 理工学研究科 応用化学専攻）で改めてスタートした研究室です。現在（2018年度）では、田中健教授、柴田祐助教、博士課程4名、修士課程7名、学部生4名の15人の学生が在籍しています。南一号館の5階の西側に位置しており、東二号館や南一号館の最上階（2010年・2012年桜花会誌参照）に負けず劣らず、眺めのよい場所にあります。同じフロアには高分子合成の研究室があり、フロア飲み会などを通じて交流を深めています。



当研究室は「整理、整頓、清掃、清潔」をキーワードに、効率の良い実験環境を構築することで各種作業のタイムロスを徹底的に削減し、安全に短時間で最大の成果を出すことを重要視しています。不要なものは置かない、不要になったものは廃棄するといったことを徹底することで、事故防止にもつながります。夏冬年2回の大掃除では、天井から床・分析機器の裏側まで徹底的に掃除することで、機器の故障や火災を予防し、リフレッシュして次期の実験に臨めます。

研究面では、「遷移金属触媒を用いた芳香環構築」を軸に、新触媒開発から新機能性物質合成までをターゲットにしています。芳香環構築のエネルギーを利用することで従来法では合成が困難であった歪みの大きな化合物群の合成にも成功しています。また、これを活かして中心不斉だけでなく軸不斉・面不斉・らせん不斉をもつ化合物のエナンチオ選択的合成にも取り組んでおり、医農薬・ファインケミカル・有機機能性材料への応用を目指しています。これまでに在籍した優秀な学生のたゆまぬ努力により、多くの学術研究成果を発表することができており、引き続き世界トップレベルの有機化学研究を継続するとともに、学生の教育・自立した研究者の輩出に努めて参ります。

桜花会賞受賞者の声

桜花会では毎年、大学院博士課程の学生が選考した優秀な卒業論文発表者に対して桜花会賞（特別賞 2 件、優秀賞 4 件）を授与しています。平成 30 年 3 月の受賞者（特別賞：山田遥香（田中(浩)研究室）、渡邊佑紀（一杉研究室）、優秀賞：越川拓海（田中(健)研究室）、野口裕太郎（大友研究室）、山下拓也（山中研究室）、劉安越（和田研究室））に、受賞の感想や近況などを綴ってもらいました。

◆山田 遥香（田中(浩)研究室）

今回、桜花会の名を冠した栄誉ある賞をいただくことができたことをとても光栄に思っております。それと同時に、自分がこのような賞をいただけるとは思っていませんでしたので、驚きと、賞にふさわしい研究者にならなくてはという思いもございます。



自分は、研究室に所属するまでの学部時代は、勉学はほどほどに、もっぱらテニスに明け暮れていました。有機化学を学ぼうと大学に進学し、志望した田中研究室に所属できたものの、実験技術はもとより座学で得られる知識が不十分であり、田中先生や先輩方には有機化学の基礎から徹底して教えていただくこととなりました。自分が卒業発表をできるまで研究を進めることができましたのは、そういった研究室での熱いご指導、とりわけ師匠である当時修士 2 年の鯉沼僚輔さんのご指導のおかげだと感じております。鯉沼さんには、糖鎖合成に携わる研究者の先輩として、多くの技術と心構えを教わりました。「グリコシル化をする日の朝は気合を入れてこい」という教えのもと、1 年間糖鎖の研究を進めてきました。その習慣のおかげで今もグリコシル化を行う日には、気が引き締まります。自分も修士 2 年の頃には、後輩を指導することになりますので、自分にとっての鯉沼さんのような、尊敬される科学者になりたいと思っております。

最後になりましたが、このような機会をあたえていただいた桜花会の皆様方、ならびに先生方に御礼申し上げます。ありがとうございました。

◆渡邊 佑紀（一杉研究室）

このたびは、桜花会特別賞という名誉ある賞をいただき、とても光栄に感じております。

この一年間は装置の立ち上げをひたむきに頑張っていました。一杉研究室が東工大に移って 2 年目だったこともあり、研究室に配属されてすぐに装置の立ち上げが始まり、装置の立ち上げが終わった頃に次の装置の立ち上げを任せられ、いくつかの

装置を「たらい回し」にされた覚えがあります。そうこうしているうちに11月になり、本格的に実験を始めました。その後は先生方、先輩方の支えもあり何とか卒論発表までたどり着くことができました。そして、その「たらい回し」は、実は、様々な実験装置に触れて「研究の勘を養う」という先生方のご配慮だということに気づきました。この場を借りて、心から感謝を申し上げます。

発表スライドや原稿、ポスターの作製では、先生方のとても厳しいアドバイスをいただき、何度も何度も添削していただきました。発表練習でも緊張していましたが、本番当日は練習と同じように発表することを心がけたおかげであまり緊張することなく発表することができました。応用化学コースの他研究室に配属した同期達の素晴らしい発表も心に残っています。ポスター発表では、一杉研究室で得た知見を活かし、他研究室の先生方、先輩方からの質疑にも対応することができました。

最後になりますが、常日頃から研究環境を整えてくださった一杉先生、日々ご指導いただいた清水先生、西尾先生、同じ装置で実験させていただき、毎日のようにディスカッションしていただいた小林さんをはじめとする先輩方や同期に改めて感謝を申し上げます。今後は、今回の受賞に慢心することなく、日々精進していきたいと思っております。ありがとうございました。



◆越川 拓海（田中(健)研究室）

この度は桜花会優秀賞という名誉ある賞をいただき、大変光栄に思います。このような賞をいただくことができたのもこれまでご指導をいただいた田中健先生、柴田先生、秘書の堤さん、師匠として指導してくださった佐藤さん、そして研究室の先輩方、同期の皆さんのおかげだと感じています。この場を借りて感謝を申し上げます。



学部三年生までの私は、講義とその予習・復習・宿題中心の生活を送っており、土・日曜日を含め、自宅→講義室→図書館→自宅→…という生活サイクルでした。また、部活・サークル活動やバイト等は一切行っていませんでした。当時の私は「これが大学生のあるべき姿」だと思い込んでいましたが、研究室に所属した後に自身の体力の無さ、効率の悪さを痛感し、今では多少の運動・労働が必要だったのではないかと後悔しています。

研究室での一年を振り返ってみますと、私の研究生活は決して褒められたものではありませんでした。洗浄中に特注のカラム管を割ったり、グローブ BOX のパス BOX の蓋を破壊し、師匠の佐藤さんに修理してもらうなど多大なるご迷惑をおかけしました。さらに、研究室配属後、直ぐに金触媒による不斉合成という研究テーマ

をいただきましたが、院試三日前にその反応が新奇ではないこと、九月上旬には不斉合成すらも既に達成されていることが判明し、私の担当する研究の新奇性は低いものだとわかりました。このことが判明するのが遅れてしまったのは、ひとえに自身の調査不足によるものです。研究を進めることに必死になり、先行研究の有無を調べることを蔑ろにしていました。当時の私は自分の不甲斐なさと、多大なるご支援をいただいていた先生方や先輩方に対する申し訳なさを感じていましたが、田中先生に「新奇性が全くないわけではないから大丈夫」とお声をかけていただいたり、先輩方・同期の皆さんに励ましていただき、平静を保って実験を続けることができました。そのおかげで、何とか卒論発表を行うのに恥ずかしくない程度の実験結果を集めることができました。また、論文収集の甘さを反省し、自身の研究テーマの先行研究を必死に調査したことで、その分野に詳しくなり、今では自分から次回の研究内容を提案できるようになりました。また、卒論発表準備期間では、田中先生、柴田先生をはじめ、多くの先輩方に発表スライドやポスターを隅々まで添削していただいたり、何度も口頭発表を見ていただきました。私が桜花会優秀賞を取れたのは、自分一人によるものでは決してなく、研究室の皆さんのご支援あってのものだと感じています。

最後に、田中先生、柴田先生、堤さん、先輩方、同期の皆さんに改めてお礼申し上げます。ありがとうございました。

◆野口 裕太郎（大友研究室）

この度は桜花会優秀賞という荣誉ある賞を頂き、大変光栄に思っております。このような賞を頂くことができたのも、私個人の力ではなく、熱心に指導してくださった大友明先生、どのように研究を進めていいのか迷っている時に豊富な知識で道を教えてくださった吉松公平先生、そして日々のスライドや発表用のポスターを添削し



てくださった西暁登先輩を始めとする研究室の先輩方の支えと、発表スライド用の写真(上の写真)の構図を探すのに尽力してくれた同期達、この男臭い研究室のメンバー全員の手助けのおかげであります。この場をお借りして、このような機会をつくっていただいた桜花会に心より感謝申し上げます。

この一年は、先生方の指導や先輩方のアドバイスを受けながら研究を進めていくことで、自分には何が足りないのかを考え、それを補っていくような毎日でした。この写真は日々の実験の様子を写したものであり、実験でお世話になりました石曾根隆研究室の方々には感謝を申し上げます。自分の望んだような成果が出ることはほとんど無く苦しい闘いでしたが、その日々があつてこそその今があると思っております。

ます。

「卒業発表はお祭りのようなもの」、望んだ結果が出ないまま卒業研究発表が近くなり焦る私はその言葉を受けたときに、楽しんで発表しようと良い意味で割り切ることができました。その結果としていままで練習した成果を発揮することができ、今回の受賞に繋がったのではないかと感じております。

この受賞に驕れず、今後は大学院生として多くの先生方や先輩に教えを乞いながら、後輩を指導する先輩としてふさわしくなれるよう精進して参りますので、今後ともご支援よろしくお願ひいたします。ありがとうございました。

◆山下 拓也（山中研究室）

この度は桜花会優秀賞という名誉ある賞を頂く事ができ、大変光栄に思っています。このような結果を残すことが出来たのは熱心にご指導くださった山中先生、先輩方、また共に励まし合い切磋琢磨した友達のお陰です。心より感謝申し上げます。

自分にとって研究室に配属されてからの1年間は大学生活の中で最も大変でしたが、これまでの大学生活の中で最も充実した時間だったように思います。「教科書を正確に理解する」という勉強から「知識を基に自分で考えて新しいものを作り出す」という勉強に切り替えなければならず、配属当初は非常に戸惑いました。テーマ決定後も初歩的なミスばかりを繰り返し、落ち込んで帰るといった日々の連続でした。しかし、研究室に配属された友人達も同じように悩みながら努力する姿を見て「自分も頑張ろう」と奮起し、粘り強く実験を続けることが出来ました。1月末に山中先生のアイデアを基に新しい電極を開発し実験を行ったところ、今までのデータと比較にならないほどの高活性の電極の作製に成功しました。実験室から飛び出して山中先生に大喜びでこの結果を報告した時のことは今後も決して忘れないと思います。卒業研究発表会の直前になんとか予定していた全ての実験を終え、山中先生、先輩方に発表資料を何度も添削して頂き、友人達と励まし合いながら共に発表練習を繰り返すことで自信を持って発表会に臨むことが出来ました。このように多くの人の支えがあってこの賞を受賞できたのだと実感しています。

今後は、同研究室の修士として夏の学会に向けてこれまでのデータの補足、及びより高活性の電極、触媒を探索しながら反応メカニズムを明らかにしたいと思っています。日々学ばなければならないことは膨大ですが、卒業研究で学んだ研究の面白さを原動力にし、この恵まれた環境で努力していきたいと思っています。

最後になりましたが、いつも熱心に指導し、アドバイスをくださった山中先生。

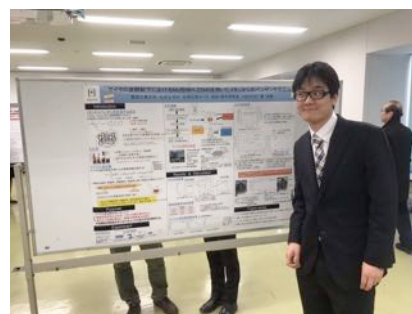


優しく見守り、困った時にはいつも助けてくださった先輩方。また、共に励ましあい、一緒に受賞を喜んでくれた友人達に心から感謝します。この賞の名に恥じないような立派な人間になれるように修士課程でも頑張ります。今後ともよろしくお願い致します、ありがとうございました。

◆劉 安越（和田研究室）

この度は桜花会優秀賞という名誉ある賞を受賞でき大変嬉しく思います。心より感謝申し上げます。

学部の3年間で全く学ばなかったマイクロ波に関する研究テーマを4月に与えられ、右も左もわからない状態で研究生生活がスタートしました。マイクロ波に関する学習は非常に楽しく、今の研究テーマで良かったと心から思います。学問的な知識だけでなく、多種多様な分析装置の使い方を学び、配管工事を学び、固定床流通式触媒反応のノウハウを学び、技術的にも大きく成長しました。1年前の今頃と比べて非常に成長できたと思っています。これはやはり聞いて学んで学習することが重要だった学部時代と、自分で考えて動く研究生生活では大きく異なり、充実した一年を過ごすことができました。



しかしうまくいかなかったことのほうが多く、何度も何度も心が挫けそうになりました。12月頃から土日も研究室に通って毎日毎日夜遅くまで実験しました。しかしそれでも結果が思うように出ず、そんな中で何度もアドバイスをしてくださった椿先生を始め、研究室の先輩方、同期には本当に感謝でいっぱいです。大変ありがとうございました。最終的には悪くない結果を得られて非常に嬉しかったです。

卒論発表前日は多くの先輩方から発表の仕方やコツなどを教えて頂きました。それらの助言を生かして当日は実に納得のいくスライド発表、ポスター発表となりました。結果的にこのような賞を受賞することになってとても良い経験となりました。この経験を糧に、これからの大学院生活でも質の良い研究生生活を続けていきたいと考えております。まだまだ自分の研究テーマには課題が山積みですので一つ一つクリアしていきたいと考えています。

最後になりますが一年間私の研究室生活を支えてくださった和田先生、鈴木先生、椿先生に感謝の言葉を申し上げたいと思います。ありがとうございました。また、楽しく質の高い研究室生活の源となっていた先輩方、同期にも感謝の言葉を申し上げたいと思います。ありがとうございました。来年以降も先輩方の築いた研究室の雰囲気、文化を引き継ぎたいと思います。和田研に配属できて非常に幸せです。

教育奨励事業報告

■ ■ ISPAC2017 参加報告

山下 実都喜（村橋研究室）

私は、桜花会教育奨励事業のご支援を戴き、2017年6月8日から10日に渡ってベトナム・ホーチミンで開催された“International Symposium on Pure and Applied Chemistry 2017”に参加し、ポスター発表を行いました。学会の名の通り、化学に関して幅広く討論することのできる学会です。

私はこれまでに海外渡航経験がなく、今回の学会発表が初の海外であったこともあり非常に緊張しました。私は非常に英語が苦手で、学会の受付を終えるのも大変でした。さらにポスター発表の案内が無く、それを聞くのにもかなり苦労したことをよく覚えています。ポスター発表は、時間が決められておらず昼食やコーヒブレイクの時間を使って行われるため、会期中私は昼食を急いで済ませ、ポスターの前に向かっていました。会場で出される現地の料理をゆっくりと味わうことができなかったのは残念でありましたが、海外で発表する良い経験になりました。外国の研究者の方々と英語で議論することができて、大変有意義でありました。また、私の下手な英語であっても真剣に聞いていただいたことが、何より嬉しかったです。

さて、国際学会といえ、海外の研究者とのディスカッションも良いですが、現地の文化を肌で感じることも醍醐味の一つであります。飛行機を降りてから、今まで住んでいた世界とは全く違う世界が広がっていました。交通は整備されておらず、信号すらなく、歩道には時折、大きな穴が開いていました。街を歩けば、なぜか所々にハンモック売りにおじさんがいて、外国人だと判ればバイクタクシーの利用を執拗に迫られました。街に漂うエスニックな香りとなんとも言えない蒸し暑さが刺激的でした。特



写真1. ポスター発表の様子



写真2. 戦争証跡博物館正面

に記憶に残ったのが戦争証跡博物館です。実際に戦争で使用された武器や被害を受けた方々の写真などベトナム戦争の記録を閲覧することができます。中でも、枯葉剤の被害に遭われた方々の写真を見たときは、ぞっとしました。あまりにも化学技術の使われ方が間違っていると感じ、将来化学がどうあるべきか、絶対に間違った使われ方をしてはいけなと真剣に考えることができました。

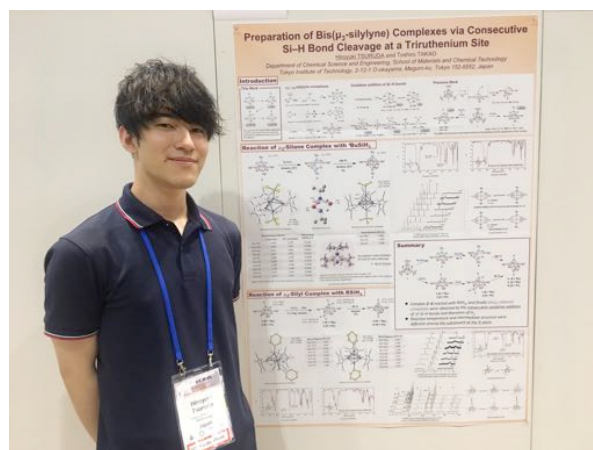
最後に、この度学会に参加するにあたり、多大なご支援を賜りました桜花会の皆さま並びに旧応用化学専攻の先生方、またこのような国際学会に参加する機会を与えて下さった村橋哲郎先生・山本浩二先生に深く感謝申し上げます。

■ ■ ICCC2018 参加報告

鶴田 浩之(高尾研究室)

私は、桜花会教育奨励事業のご支援を頂き、2018年7月30日～8月4日にかけて仙台で開催された、43rd International Conference on Coordination Chemistry (ICCC)に参加し、ポスター発表を行いました。ICCCは錯体化学関連の国際学会で、錯体を用いた小分子活性化や生物無機、MOFや磁性材料など、多岐にわたった分野の研究発表が行われております。中には、ポリ酸をタンパク質結晶の添加剤にするという、「これって本当に錯体化学?!」と思える発表もあり、非常に幅広い分野の方が参加されていると感じました。

国際学会とはいえ、仙台で開催されていたため、日本人の参加者がかなり多く(体感では3分の1ほど)、そのためか私の発表では海外の方とディスカッションすることなく、終始日本人の方と話して終わってしまいました。少し肩透かしを食らいましたが、他の人の発表を聴くときや廊下でのちょっとした会話まで全て英語という環境は、海外旅行さえしたことの無い私にとって、とても新鮮でした。私の悲惨な英語力でも言いたいことが伝わるものだと実感できたのは大きな収穫でしたが、流暢な英語ほど聞き取れず、自分のリスニング力のなさを痛感しました。



今回が私にとって初めての国際学会だったのですが、国際学会と国内学会とのスタンスのズレや、自分と海外の方との感覚の違いが面白く感じました。事前に、カジュアルな恰好で参加して下さいというアナウンスがあったのですが、学会でのカ

ジュアルな恰好とはどんな恰好なのかと悩み、流石に襟付きの服を着用しようかとポロシャツを購入して参戦したところ、自分が思っていた以上に半袖 T シャツ&短パンの方がいてびっくりしました。右サイドが虹色のヘアスタイルの女性も参加しており、なんと下らないことで悩んでいたのかと反省しました。ポスター発表も、軽食とお酒を片手にディスカッションが行われるなど、国内学会のような堅さは全く感じられず、とても楽しく明るい雰囲気でした。(口頭発表中に会場で弁当を食べている方だけは許せなかったのですが、これも文化の違いなのでしょう…。)

最後になりましたが、この度ご支援いただきました桜花会の皆様、国際学会に参加する機会を与えて下さった高尾先生に深く感謝申し上げます。ありがとうございます。

桜花会企画のご案内

今年度も、卒業生と教員、現役学生との交流を深める企画を予定しております。企業見学会、卒業生による企業説明会、卒業祝賀会を開催する予定です。桜花会会員の皆様には、ぜひこれらの機会にご来学いただき、旧交をあたためるとともに、学生や教員とも交流を深めていただければと存じます。なお企画の詳細につきましては桜花会ホームページをご覧ください。

■ ■ 企業見学会

日時 平成 30 年 10 月 26 日 (金)

場所 三菱ケミカル株式会社 横浜研究所

■ ■ 第 10 回学生と卒業生との交流会

日時 平成 30 年 12 月 8 日 (土) 13 : 00 ~ 18 : 40 予定

場所 東京工業大学 東工大蔵前会館ロイヤルブルーホール

■ ■ 卒業祝賀会

日時 平成 31 年 3 月 26 日 (火) 予定

詳細は後日桜花会ホームページ、電子メールなどのご案内いたします

会員の声

桜花会では毎年郵便振込にて会費納入をお願いしておりますが、その払込用紙の通信欄にご近況などをお書きくださる会員の方がいらっしゃいます。

ここでいくつかのメッセージをご紹介しますと思います。

植村 勝 (S28 年学部、S60 年博士) だんだん長老の域に達してきましたが、生きてます。	谷口 功 (S50博士) 熊本と東京を行き来しています。
--	---------------------------------

— あとがき —

今年は大阪府北部地震、北海道胆振東部地震、さらには西日本豪雨や台風 21 号に加えて記録的な猛暑など、自然の脅威が記憶に残る夏となりました。災害に遭われました方には心よりお見舞い申し上げます。

暴風で流されたタンカーが空港橋に衝突したことによる関西国際空港の孤立化、一つの火力発電所の被災をきっかけとした道内全域停電など、思ってもみなかった形で被害が拡大する様には考えさせられました。また西日本豪雨の影響で、日本の大動脈の一つである JR 山陽本線の一部区間が未だに不通のまま (9 月上旬現在) であるなど、その存在を当然とってきた生活・交通などのインフラの回復が容易でない現状を見るにつけ、これからは新しいものを作るだけでなく、地味ではありますが今あるものを残す、強靱化する、円滑に代替わりさせる技術がますます大切になるように感じています。

最後に、本誌編集関連作業をお手伝いくださいました事務局の露崎様にこの場をお借りしてお礼申し上げます。

(SK)

平成 30 年度桜花会事務局

〒152-8552 東京都目黒区大岡山 2-12-1 S1-22

東京工業大学物質理工学院 応用化学系内 桜花会事務局

(直接お問い合わせいただく場合は、下記までお願いいたします)

平成 30 年度桜花会庶務幹事 一杉太郎

電話 03-5734-2636 Fax 03-5734-2636

E-mail: cherry@apc.titech.ac.jp

桜花会ホームページ <http://www.apc.titech.ac.jp/~okakai/>